

これはヨーロッパにある労働者協同組合ではないか、ということも知ったが、あくまで「労働者が主人公」を貫き、「全組合員経営」を提起し、進める中で「労働者協同組合」に行き着き、ここでの労働とは何かを問う中で「協同労働」を発見した。

スペースの関係で削ってしまったので、ここで紹介しておきたいが、永戸さんは理事会などでリーダーの主体性をきびしく求めた。

「ダメな事業所長は『なぜ』も『主体性』も『責任』も『立場』もない。他人事だ。これでは組合員も『そう言われりゃあ、やらなかったなあ』と思うだけだ。考えない、工夫しない、困難にぶつかるとすぐ逃げる、率直でない、反省がない、したがって進歩しない」

こんなこともやってきて今日がある。

●仲間たちの頑張り

3つ目に、そのことも関わって、現場の仲間たちが、どんなふう

に頑張ってきたか。
歴史の章では、「捨てるゴミの向こうにも人がいる」という労協新聞（当時は「じぎょうだん」新聞）連載を通じて、事業団は病院の下請けではない、安心・安全な病院をつくる仲間だ、という誇りを持った組合員たちが、よい仕事・仕事拡大に取り組んだことを載せ、「『協同労働』の現場を見る」の章ではこんな

岩波ブックレット No. 1059

〈必要〉から始める
仕事おこし

「協同労働」の可能性



日本労働者協同組合
連合会 編

地域や暮らしに必要な
仕事は自分たちでつくる！
日本社会を足元から変える
新しい働き方「協同労働」とは

 わかる、使える（はじめの1冊）
岩波ブックレット

定価（本体620円＋税）

言葉を紹介した。「みんなで話し合っている。それ自体が協同労働」（深谷・岡元かつ子さん）、「協同労働は生きづらさをエネルギーに変えられる。日本社会は生きづらさが蔓延しているから、可能性は無限大！」（苫小牧・松崎愛さん）

●法案づくり

もう一つ、全党一致の法案がどのようにしてつくられたのか、少ししか紹介できなかったが、衆議院法制局へは感謝してもしきれない。

「出資も労働も経営も全て担う協同労働」の意義についても、理念的には「労働者協同組合には『雇う・雇われる』関係はない」ということについても、よく理解してくれたうえで、「経営」を「意見反映」に置き換え、現在の法体系とギリギリ矛盾しない形で法案をつくってくれた。

暑氣払いの場を設け、「設立方式について準則は検討しなかったですね」と永戸さんが恐る恐る尋ねると、奥克彦部長は「必要がないからです。認可制度をとるなんて、今時ありません」と明快だった。

●歴史は真実に

最後の「日本社会を足元から変える」の章では、「企業は株主が売り買いする『商品』となってしまうが、みんなの『意見反映』を原則とする労働者協同組合のようなあり方こそが、あるべき姿なのではないのか」という吉原さんの根源的な問いも紹介し、この言葉に思いを込めた。

「歴史は いま 真実に至り、新たな歴史に進む」

映画「中村哲の仕事・働くということ」、協同総研「協同ではたらくガイドブック」などとあわせて、みんなの「宝物」として学び、広げてほしい。

本体620円＋税。 労協組織の注文は著者割引適用あり